

---

# 或る日の風景

川村

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

或る日の風景

### 【コード】

N6957D

### 【作者名】

川村

### 【あらすじ】

夜の森からはじまる黒猫と白ねずみの日常的冒険譚。一話完結型。

## 或る日の風景・その1

浮き出る陰影を目視できる程淡く白い月が地上を照らしている。渴いた熱い風が土の上を吹き抜け、木々が呼応してざわめく。どこまでも続く深い森。立ち込める草の香り。

黒猫は言う。

「月が綺麗だねえ」

白ねずみは言う。

「今日は十五夜だ」

「あのね、あのね、今日みたいな丸い月の光を浴びるとね、木たちがね、秘密を喋りだすんだって」

「植物と動物は生命という点に於いては同じだろうが、口があるわけじゃない」

「いや、でも、何か不思議な方法で伝わることがあるかもしれない。木たちの秘密なんて、どんなだろう。ああ、僕に聞こえないかなあ。白ねずみは、何か聞こえる？」

「何も聞こえない」

「ああ、でも、木と木がぶつかる音がするねえ。葉っぱがしゃりしゃり言ってるねえ」

「それは声じゃない」

不意に闇が濃さを増す。雲が月を薄く覆っている。風が止む。

一瞬、完全な沈黙が訪れる。びゅうと音を鳴らして強い風が吹き抜ける。

ざあああ、と葉の擦れる音が音楽のように森中へ広がっていく。

黒猫の耳がびくりと動く。

「聞こえた！」

白ねずみは耳を澄ます。

「何が」

「ほら、木の声だよ！月の夜はよく飛べるだろうね、って！白ねずみには聞こえなかった？」

「聞こえなかった」

「ああ、僕飛べるのかなあ！でもこんな綺麗な光の中なら、本当に飛べそうだなあ！飛べないのがおかしいくらいなもの」

白ねずみは黙り込む。黒猫は立ち止まり、白ねずみに笑いかける。

「僕が飛べたらさ、飛び方教えてあげるよ。僕が連れて行ってもいいよ、一緒にさ」

黒猫は群青の空にぽっかりと浮かぶ満月を仰ぐ。

「あの月まで行けたらいいねえ」

黒猫は両手を天に伸ばす。足に力を込め、ゆっくりと土を蹴る。

白ねずみの動悸が速まる。

黒猫は跳ぶ。そして地面に落ちる。手も足も動かし何度も飛ばすとする。次第に飛ぶ力が弱くなる。息をつき、黒猫は座りこむ。

黒猫は目を閉じる。飛び起きるや否や、黒猫は近くの木に突っ込んだ。そのままがしと天辺へ上ってゆく。

白ねずみが見上げると、大木の上で小さな黒いシルエットが手を振った。

「白ねずみー見ててねー僕飛ぶからねー！」

白ねずみは口を開ける。

黒い影が宙へ躍る。

\*

\*

\*

気絶している黒猫を、白ねずみがおぶっている。

白ねずみは呟く。

「推進装置ロケットに乗った方が早いんじゃないか」  
涼やかな風が草を揺らす。

もう秋が着いたらしいね  
どうも楓のところのようだね

白ねずみは耳を震わせ後ろを見る。黒猫は気絶している。葉が擦れる音が絶えずさやぐ。白ねずみは頭を一つ振り、ずんずん歩いてゆく。

森の出口を抜ける。白ねずみはそつと振り返る。楓の木の根元に、まだ青い薄うすがまばらひらららに生えている。

真つ暗な森の上空を二匹の翡翠が月光を浴びて泳ぐように旋回している。

或る日の風景

或る日の風景

或る日の風景・その1  
(後書き)

## 或る日の風景・その2

白ねずみは右を向いた。

木の扉に両脇を遮られた狭苦しい路地が続いている。既に日は沈んでいるが、まだ西の空は青さを残している。曲がりくねった路地はどこまでも続いているように見える。

白ねずみは左を向いた。

木と土の交じり合ったにおい。薄汚れた木材が十本、木の扉に立てかけられている。その下には細かい木屑が散らばっている。泥まみれのドラム缶が二つ押し合うように並べられている。行き止まりだ。

白ねずみは前を向いた。

木造倉庫の入り口が口を開けている。中は真っ暗で何も見ることができない。入り口から吹きつけた生暖かい木材の臭いに、白ねずみは体を振るわせる。

「黒猫はどこいったんだ」

白ねずみはため息をついて、飛び跳ねながら先へ行ってしまった黒猫のことを思い返した。辺りを見回すが夕闇の中に黒猫の気配は影も形もない。

「この中か…」

白ねずみはおそろおそろ入り口から首を突っ込む。だだっぴろい空間は外の薄暗さを煮詰めたような暗さだった。埃っぽい空気が鼻をつく。白ねずみは手探りで足を進める。一步。二歩。ちょうど三歩目で足を引っ掛け、顔から倒れる。静寂を砕くように音が響き渡る。

「ちくしょう、廃材か」

顔をさすりながら起き上がった瞬間、近くでけたたましい笑い声  
が上がる。白ねずみはびくりとして振り返る。闇の中で動くものは  
ない。

しばらくの間、白ねずみは床に座り込んでいた。何度か立とうと  
するが、すぐに膝が震える。白ねずみの視界の端が滲む。そのとき、  
誰かが白ねずみの頭を撫でる。白ねずみははっと顔を上げる。

「黒猫!？」

「いや、見つかっちゃったか」

黒猫が部屋の奥に積んである木材の陰から顔を出す。

白ねずみはぎこちなく立ち上がり、叫ぶ。

「あのなあ、ふざけたことするなよ! だいたい、人が転んだの見  
て笑うなんて、失礼だ」

そのまま白ねずみは入り口から出て行く。

黒猫は木材の陰から走り出し白ねずみに追いつく。二人は廃屋か  
ら出て、霞がかかったような暗さの路地を足早に歩く。

黒猫はすまなさそうに首を傾げる。

「ごめん。ごめんね、白ねずみ。もしかして、恐かった?」

「そんなわけではない」

「なら、よかつたけど。あ、そういえば白ねずみの友達は? 一緒  
に入ってきたよね?」

「え?」

白ねずみは驚いて黒猫を見る。黒猫は不思議そうに白ねずみを見  
返す。

「入ってきたとき、白ねずみの後ろに誰かいたよ? 白ねずみが転  
んだとき笑ったのも僕じゃない」

白ねずみは黙った。ちょうど五歩、歩いた後で口を開く。

「黒猫は、ずっとあの場所にいたのか？」

黒猫はこっくりと頷く。

「うん」

「じゃ、別に、さつき、僕の頭を撫でたりしてないよな」

「そんなことしてないよ」

「……」

「……」

白ねずみは眉間に皺を寄せる。黒猫は少し笑って星の輝き始めた空を見上げる。

「ねえ、白ねずみ」

「何」

「タソガレって知ってる」

「黄昏？ 今くらいの時間のことだろう」

「うん、そうなんだけども。タソガレって、誰そ彼って書いてね、誰がいるのか分からなくなる時間なんだから」

「誰がいるのか分からなくなる？」

「うん。知ってる人のような、そうじゃないような、僕のような、白ねずみのような、そういうのがこっちゃんになっちゃう時間なんだから」

「……ふーん」

「うん」

暗い街でネオンが輝く大通りまで出た黒猫と白ねずみは、同時に顔を上げる。互いの瞳に互いが映り、どちらともなく笑い出す。

「白ねずみだよね」

「黒猫だろ」

「また探検しようねえ」

「ああ、さっきのは風の音だったんだな」

「それは、どうかなあ」

或る日の風景

白ねずみは黒猫を睨む。黒猫は楽しそうに笑う。

或る日の風景

或る日の風景・その2（後書き）

### 或る日の風景・その3

「蒼いなあ！」

「そんなわけないだろう」

「そう？ でも、空が映って、ほら、青い感じがしないかな？」

言われて白ねずみは空を見上げた。

耳が切れそうなほど冷え込んだ空気。吐く息こそ白い。

視界一杯に広がる淡色。輝度が足りない空に浮かぶ雲は紺色を崩さない。それを地として月は青白い図となっている。

この圧倒的な面積差では図地反転の起こる余地はないと白ねずみは考えた。だが光度差が少なくと図と地の区別は難しくなる。

白ねずみは顔を戻し、眼前の光景を見つめる。

「月のことじゃないだろ？」

黒猫は首を傾げる。

「うん。だってほら、すごいじゃない、見てよ、この雪！」

一面にまつさらな雪が黒猫と白ねずみの前に広がっている。

「雪は白だ。青じゃない」

「そうかな、少し蒼くないかな。まあいいや、足跡つけてこつよ、白ねずみ！」

言うやいなや黒猫は跳びながら走り出す。

それを見た白ねずみも直ぐに駆け出す。横に並ぶ白ねずみを横目で確認した黒猫は速度を上げる。白ねずみも追い越すように走る。

黒猫が半歩先を駆け抜ける。白ねずみは歯をくいしばる。

黒猫が後ろをひよいと振り向いた瞬間、鈍い音が静寂に罅を入れ

る。振動している大木から落ちてきた大量の雪が黒猫を埋める。白ねずみは足をもつれさせ数回転がっていく。

しばらくして、雪景色は元の静謐を取り戻す。まだ揺れている古木の下に雪がこんもり盛り上がっている。

「黒猫？ 大丈夫か？」

「雪まんじゅうは沈黙を保っている。」

「黒猫？ 黒猫？ おい、どこだよ？」

「白ねずみは目の前の雪まんじゅうを叩く。」

「……黒猫！ 動けないのか？」

「白ねずみは雪を跳ね散らかして雪の塊を引つ掻き回す。半壊した雪山の底から雪をまとわりつかせた黒い足が突き出している。白ねずみの顔が蒼褪める。」

「黒猫！ 待つてる、今引つ張るから！」

「白ねずみは黒猫の足を掴んで後ろに引つ張る。白ねずみの足が柔らかい雪に沈んでいく。埋まった足を引き抜いて、白ねずみは数歩後ずさりする。」

「黒猫の両足が現れる。その足がばたばた動いたかと思うと、雪が盛り上がって、顔中に雪を被った黒猫が上半身を起こす。」

「あー、びっくりしたー！」

「……」

「あ、白ねずみ！ ありがとう、引つ張ってくれて」

「元気そうだな」

「うん。大丈夫みたい。いや、意外と面白かったなあ」

「嘘付け」

「本当だつてば。白ねずみも埋まってみなよ」

「嫌だ」

「そうかな、絶対楽しいってー！」

「嫌だ」

黒猫は雪を両手に取り、白ねずみに放り投げる。白ねずみは雪玉を黒猫目がけて投げつける。黒猫は後ろに下がると、白ねずみに向かって飛びかかる。

ちょっとした取っ組み合いの末、白ねずみと黒猫は雪の上に寝転がっていた。荒い呼吸があたりの静寂を僅かに乱している。やがてそれも収まり、再び辺りを静寂が支配する。地平線から空へ光が注がれ始める。

黒猫は両手を伸ばして転がる。

「足跡、ずっと続いてるねえ」

黒猫の囁く声は冷たい空気へ溶けてゆく。

白ねずみも走ってきた方へと顔を向ける。

「そつだな」

「あ！ 雪が白いよ！」

「さつきからそつだ」

黒猫が叫ぶ。白ねずみは仰向けに寝転がる。視界を埋め尽くす突き抜けた蒼。雲は白色を取り戻し、月は地に取り込まれようとしている。

「もつ日の出だ」

「本当だ！ 太陽が出てきてる！ 綺麗だねえ」

「明るいな」

「雪、キラキラしてるね」

「そつだな」

「気持ちいいなあ」

「そつだな」

「……」

「寝るなよ」

ちえつと言って黒猫は笑う。白ねずみも苦笑する。黒猫はぴよんと起き上がって、白ねずみに手を差し出す。白ねずみも立ち上がり、体に付いた雪を払う。

「こっそり出てきたからさ、怒られないといいね」

「気づかれなけりや大丈夫だろ」

黒猫と白ねずみは、新しい雪に再び足跡を付けながら戻ってゆく。雪を落とされた古木の下には、丸い窪みが二つ残っている。

## 或る日の風景・その4

「黒猫は来ないの」

声は背後から唐突に聞こえた。白ねずみは飛び上がった。振り向いた。

「何」

「黒猫は来ないの」

目の前に立つ少女は静かに繰り返す。白ねずみは目を細める。

黒いおかつぱ頭。薄茶色のワンピースを着ている。瞳は不思議な光彩を放つ灰色だ。

二つの灰色の目が白ねずみをじっと見据える。

白ねずみは眉をひそめる。

「誰」

「黒猫は来ないの。だから、白ねずみが迎えに行って」

「どういうことだ」

「あたしのせいなの、黒猫は来ないの。でもあたしには何もできないの。だから、白ねずみに」

少女はそっと自分の腕を押さえる。白ねずみは目を見開く。少女の腕に白い包帯が不恰好に巻かれている。

「行って欲しいの」

少女は言う。

陽射しは柔らかく草原を包んでいる。昨日は吹き荒れていた南風が穏やかな微風に変わっている。濃厚な草の香りが強く鼻を突く。それを風が拡散する。

白ねずみは尋ねる。

「黒猫の友達か？」

「とにかく来て」

少女は言つや否やくるりと背を向けて歩き出す。一瞬その姿を見送りかけて、白ねずみは急いで少女の背中を追う。

少女は草原を抜ける。白ねずみも続く。緑色の絨毯の上を四本の足が進んでいく。古木の脇を通り抜け、細い川を越える。森を抜け、街に入り、狭い路地を右に曲がり、左に廻る。

点在している小さな家々に続く道の一角で少女は立ち止まる。土塀が周りを取り囲んでいる。固い土の小道が迷路のように曲がりくねる。見上げる空の広さは限られている。路地の一角に細長い木が根を張っている。

白ねずみは自分が全く知らない場所に立っていることに気づく。少女は木の根元、土が盛り上がっている部分を指で差す。白ねずみはそこに目を向ける。盛り上がっているように見えたのは土ではなかった。

白ねずみは駆け寄る。

「黒猫!？」

白ねずみが叫ぶ。横になっている黒猫を乱暴に揺さぶる。

黒猫は細目を開けた。

ゆっくりと大あくびをする。

「……白ねずみー? あれ、白ねずみ? 何やってるの」

「黒猫こそ何してるんだ」

「えーっと…何だったかな」

白ねずみは深い溜息をつく。黒猫は腕をゆっくり伸ばして辺りを見回す。

「もしかして、日が高い？」

「苺摘みの時間を過ぎてる」

「約束は」

「今日だ」

「ああ、そう」黒猫は視線を宙に注ぐ。

「そうかー。僕ね、昨日の夜、木を直そうと思って、ああ、そっか、落ちちゃったんだね」

「またか。ああ、怪我は」

黒猫は静かに起き上がり、一回飛び跳ねて顔をしかめる。

「左足首が痛い。でも、歩けるよ」

「ずっとここで寝てたのか」

「寝てたっていうか。気がついたら今だった」

「まあ無事でよかった。あの子にお礼を言えよ。ここまで俺を連れてきてくれたんだ」

「あの子？」

黒猫が首を捻りながら言う。白ねずみは後ろを見る。首を振り回す。路地の間を駆回ってみる。少女の姿は消えている。

「おかしいな。女の子が、さっきまでいたのに」

「ふうん。お礼を言いたいのになあ」

「腕に包帯を巻いていた」

「包帯？」

「包帯」白ねずみは頷く。

「白い包帯だ。黒猫と約束した場所にいたんだが、その子は自分のせいで黒猫は来られなくなったと言った」

「包帯……」

黒猫は眼球を360度回転させる。

「ああ、ああ、そう」

黒猫はくすくす笑う。白ねずみは怪訝な顔をする。黒猫は満面の笑顔を白ねずみへ返す。

「ほら、白ねずみ。たぶん、この子だと思うんだ」

黒猫は脇に植えられている若い猫柳を見上げる。白ねずみも同じように視線を向ける。木の、上から三番目の枝に白い包帯が歪なフォルムでしっかりと巻かれている。

白ねずみは眉間に皺を寄せて枝と包帯を見つめている。

黒猫は左足をゆつくりと擦る。

「ここ帰り道なんだけどね、ほら、昨日は南風が吹き荒れてたじゃない。たぶんそのせいだと思っただけど、この木、あそこで枝が折れてたんだ。生木が見えて痛そうだね、家から包帯持ってきてくっつけたんだけど、風に煽られて、僕が、うん、落ちちゃったんだ」  
「……」

白ねずみは黙り込む。黒猫は猫柳の木に手を付いて立ち上がる。そして、猫柳に向かってにっこりと笑う。

「ありがとう。君の怪我也僕の怪我也、早く治ると良いね」

猫柳の枝の先、小さな灰色の芽は不思議な光沢を帯びている。

白ねずみはそっと猫柳の幹に触れる。春の陽射しを吸収したのか、茶褐色をした滑らかな幹には温もりが感じられる。

黒猫が歩きだそうとしてよろける。白ねずみは慌てて木から離れ、肩を貸す。

「ねえ白ねずみ、僕のうちに紅茶を飲もう。ごめんね、苺狩りは今度でいいかな」

「ああかまわない」

黒猫は嬉しそうに笑い、白ねずみはちらりと猫柳を振り返る。

南風は優しく頬を撫でる。猫柳の枝に巻かれた包帯が柔らかい風になびく。

## 白ねずみの話・黒猫の話

### 【白ねずみの話】

黒猫はバカだから。夢を見ていたんだ。

何の力も智慧も無いくせに、理想ばっか語りやがって。現実つてもんを見ていなかったんだ。

それでも芯がありやまだ可愛げがあるうってもんだが、考えもプリンみたいにくにやぐにやで甘いときてる。コネクタと回線が間違つて繋がってるのか、動力と出力の間にブラックホールがあるのか知らないが、非合理的なもんだ。

複雑ながらもスムーズにあるべきだろ？ イキモノってのはさ。

機械みたいにさ、自分の箍つてもんをだね、かきかきつと螺子で止めて、かちんと穴にはめこんでだね。

動力があつて、低音でモータが回つて、細かい部品が流れるようにそれぞれの役割を果たしてさ、傾いて、回転して、跳ね上げて…。そういう風に、自分の意思は出力されるだろ？ 複雑な工程を経てもスムーズにさ。そうあるべきだろ。イキモノってのは。

8ひく5は3だし、3かける66は198だ。

どうあがいたって20なんて数字はでてこないし、世の中ってのはそういう風にできている。

\* \*  
\* \*  
\*

【黒猫の話】

白ねずみはいつだってしっかりしている。うん。

本当に。いつだって色んなことよく分からないまま過ごしている僕と違って、きっと、白ねずみにはいろいろなのが分かっているんだろうな。

うーん、あんまり表に出さないけれど、きっと物事の本当のことを、分かっているんだろうなあ。

僕なんかは、空が青ければ、それで幸せな気分になっちゃうんだけどな。

誰かが笑顔なら、僕も笑顔になっちゃうんだけどな。手紙をくれたら、そこに一行しか書いてなくても、その人が僕のためにその一行を書いて、切手を貼って、ポストに投函した、そのことが分かるから、それだけで、嬉しくなっちゃうんだけどなあ。

そうやって、色んなことが綺麗だから、うん、月も、空も、森も、人も、うん、そういうの見て、僕は楽しくなってしまうなあ。

白ねずみはいつでも何かを考えている。

一人で、複雑なことを理解している。

どんなことにも、原因と結果を探し出す。そして世界を曖昧にし

或る日の風景

ておかないんだろう。  
よく分からないけれど、たぶんそれが、白ねずみなんだ。きっと。

或る日の風景

白ねずみの話・黒猫の話（後書き）

よろしければ感想等いただけると幸いです。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6957d/>

---

或る日の風景

2009年3月24日11時22分発行